國學院大學学術情報リポジトリ

On Zhu Xi's Lunyujizhu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土田, 健次郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000875

『論語集注』はどのような書物か

土田　健次郎

○　はじめに

『論語集注』は、魏の何晏の『論語集解』が古注と言われるのに対し新注と称される『論語』の代表的な注釈書である。本書は言うまでもなく南宋の朱熹（朱子、一一三〇～一二〇〇）の著作であって、朱子学の流布とともに圧倒的な読者の数を誇った。近世の東アジアの知識人のほとんどが本書を読んだといっても過言ではない。

朱熹は道学という学派に属する。この道学は北宋の二程兄弟（程顥と程頤、「二程子」と称される）を祖とする学派で、北宋から南宋にかけて時に弾圧を受けながらも次第に勢力を伸張した。[1] 朱熹が登場した時には道学はかなり社会に根を張る存在になっていた。その中で朱熹は道学の『論語』注釈の決定版を作成し、道学の内外に示そうとしたのであって、本書には道学者としての朱熹の立場がよく現れている。

一、『論語集注』成立の経緯

『論語集注』は朱熹の『論語』研鑽が結実した書物である。本書とセットとして今に伝わる朱熹の手になる二書がある。『論語精義』と『論語或問』である。『論語精義』は道学の『論語』解釈の資料集であり、『論語或問』は道学の解釈の齟齬を朱熹の視点から調停しようとした書である。資料の収集とその内容の検討という周到な手順を経て、『論語集注』は作成されたのである。

この三書のうち最初にできたのが『論語精義』であって、朱熹四十三歳の時に建陽で刊行されている。一方『論

語集注』と『論語或問』の成立については先行研究があり、[2]以下それを中心にまとめておく。両書は朱熹四十八歳（淳熙四年）の時に一応完成された（真徳秀『西山読書記』三一所引の李方子『年譜』、王応麟『玉海』四一）。確かに四十六歳の時には

『論語』はこのように草稿を書いたものの、まだ脱稿する暇が無い。［論語如此草定一本、未暇脱稿。］（「答張敬夫」一八、『朱子文集』三一）

というように完成一歩手前の状態にあったことがわかり、[3]また王懋竑が朱熹四十九歳の時とする[4]張栻の

『論語章句』は精確で簡厳、後学を導くに足る。［論語章句精確簡厳、足以詔後学。］（「答朱元晦」七、『南軒集』二四）

という語によると四十九歳には既に読まれていたのであって、四十八歳説は大いに首肯できる。なお『論語集注』は『大学章句』、『中庸章句』、『孟子集注』と併せて『四書集注』として一つのセットとなっていることは周知の通りであり、その中で『中庸章句』と『大学章句』の序は朱熹六十歳のものであるが、それは四十八歳の時の作の改訂である。

朱熹が五十六歳の時の書簡にこのようにある。

『論語或問』をお求めですが、この書は久しく修訂の時間を得られないでおります。一方『集註』の方はしばしば改定を加え変化しており、その結果『或問』と前後不相応になってしまいました。［承需論語或問、此書久無工夫修得。只集註屢改不定、却与或問前後不相応矣。］（「答潘端叔」二、『朱子文集』五〇）

つまり『論語或問』はそのままに放っておかれたのに対し、『論語集注』はしばしば改訂を加えられ、かくて両者の間には齟齬が生じることになったのである。このことは、朱熹六十七～六十八歳の書簡の中で、張元徳の

『語孟或問』は丁酉（朱熹四十八歳）本がありますが、その後改定はどのような具合でしょうか。［語孟或問乃丁酉本、不知後来改定如何。］

という質問に対して朱熹が

『論孟集注』は後に改定した箇所が多く、その結果『或問』と十分な相応を見なくなってしまい、また『或問』を修訂する時間を得られないので、それゆえ表に出さなくなりました。もし経書本文に即して十分検討し、通じない箇所があれば、『集注』を参考にし、更にご自分でお考えになるとよいと思います。この未完全な書を恃んでそれですませないことです。［論孟集注後来改定処多、遂与或問不甚相応、又無功夫修得或問、

故不曾伝出。今莫若且就正経上玩味、有未通処、参考集注、更自思索為佳。不可恃此未定之書便以為是也。」（「答張元徳」七、『朱子文集』六二）

と答えているところにも見える。

朱熹が『論語集注』の改訂に執念を燃やしたことは、六十七歳の時の書簡に

南康の『語孟』は後に修訂したテキストです。しかしこのごろ読んでみると、まだ改訂すべき箇所があるのですが、まだ着手しておりません。［南康語孟是後来所定本。然比読之、尚有合改訂処、未及下手。］（「答孫敬甫」四、『朱子文集』六三）

とあり、曾祖道が記録した朱熹六十八歳の語に

私が解釈し下に注釈を付した『語孟』であるが、……この書は私が三十歳から検討を加えたが、今に至るまでまだ改定し終えていないので、いいかげんに読まず、まずは子細を心がけよ。［某所解語孟和訓詁注在下面、……此書某自三十歳便下工夫、致而今改猶未了、不是草草看、且帰子細。］（『朱子語類』一一六・第三七条）

とあることからも知られる。なお朱熹の文献には他にも『論語要義』、『論語集義』、『論語訓蒙口義』、『論語略解』などの書名が見え、一部は同じものが改定された結果書名が異なったと推測されているが、ともかくもかなりの試行錯誤のすえに『論語集注』が作成、改定されていったのである。

ところで既に言われていることであるが、『論語集注』の版本の不完全なものが朱熹の意に反して出回ってしまった。そのことは朱熹の次の語に見える。

『論語集注』はやはり私の十年前の本であって、朋友の間に伝わり、土地の人が断り無く刊行してしまった。気がついた時には、すでにあちこちに出回って収拾不能になっていた。このテキストは不穏当な箇所が多く、非常に読者を誤らせる。要するに聖賢言語は正大明白、本来注解を待つまでもないものである。正に「一を覚えて百を忘れ、粗なるものをつかんで精なるものを忘れる」類である。［論語集注蓋某十年前本、為朋友間伝去、郷人遂不告而刊。及知覚、則已分裂四出、而不可收矣。其間多所未穏、煞誤看読。要之、聖賢言語、正大明白、本不須恁地伝注。正所謂記其一而遺其百、得其粗而遺其精者也。］（『朱子語類』一九・第七〇条）

これは楊道夫の記録で、一一八九～九二年（朱熹六十～六十三歳）の頃の語と推測されているものである。[5] これからすると海賊版が刊行されたのは五十歳くらいの時ということになり、四十八歳でいちおうの完成を見た直後のこと

になる。その後に何度も改訂を試みた朱熹としてはさぞかし遺憾に覚えたことであろう。

ともかくも『論語集注』に対する朱熹の執念はたいへんなものがあった。

二、『論語集注』の引用

『論語集注』は「集注」と言われるように、先行する諸儒の注を集めそれに朱熹のコメントを随時付した注釈書である。

まず柱になっているのは程顥（程明道）と程頤（程伊川）の所謂「二程子」であって、一貫して「程子」と尊称されている。またこの兄弟の親戚である張載（張横渠）も「張子」として尊崇されている。この三者は道学の創始者として別格の扱いと言える。

あとは二程子の弟子たちやその流れを引く者が多く引かれ、中には朱熹の師匠の劉勉之、李侗（李延平）や、友人の張栻（張南軒）の名も見える。要するに道学の儒者たちの引用が主流なのである。道学以外の儒者、例えば洪興祖、呉棫、黄祖舜、晁以道、劉敞といった面々、更には蘇軾、王安石などの道学敵対者の語と推測されているものも引用されることもあるのだが、あくまでも道学中心であることには変わりはない。

なお「程子」、「張子」以外はほとんどが姓に「氏」が付されているだけであるため（例えば「呂氏」、「謝氏」といった類）、時に弟子すらも誰を指しているかわからなくなり、質問したり確認したりしているが（『朱子語類』一九・第六七条、第六八条）、おそらく朱熹は誰の語かを確定することに拘泥する気はなく、とにかく道学系を中心に引用していることを示せればよかったのであろう。[6]

ところで『論語集注』作成のために朱熹が作成した道学の『論語』解釈の資料集である『論語精義』に引用されているのは、范祖禹のような同調者もいるが、ほとんど道学者だけである（范祖禹は『論語集注』にも引かれている）。この書では「伊川解曰」として程頤の『論語解』（『程氏経説』六所収）が特別扱いされ、わざわざ他の程頤の語と区別して引用されているほどである。朱熹が『論語解』を重んじた理由は次の文に端的に示されている。

二先生が経書を説く場合、このように同じでない箇所も多い。時には年代による変化、時には誤伝もあろう。であるから義理によって推測して取捨を加えなければならない。このように見てくると、『論語解』を基準

にすべきということになる。やはり内容が最も優れているし、先生が晩年自分で著したものであり、最も信ずるに足る。[二先生説経、如此不同処亦多。或是時有先後、或是差舛。當以義理隠度而取捨之。如此説、則当以解為正。蓋其義理最長、而亦先生晩年所自著、尤可信也。]（「答石子重」一一、『朱子文集』四二）

『論語解』は程頤の晩年の自著だから別格なのである。[7] また『論語精義』と『論語集注』の違いとして、前者では程顥と程頤の語を分けて引用しているが、後者では一貫して「程子」と称して両者を区別していない。朱熹が『論語集注』という完成体において、二程子を一丸のものとして扱っていることは、やはり重要な意味があろう。

このように『論語精義』は道学者中心であり、『論語集注』はそれよりも引用の幅が広いのであるが、基本的には『論語集注』は『論語精義』所収の資料を柱にしている。朱熹は道学者たちの『論語』解釈を周到に収拾し、更にそれらの異同を『論語或問』で検討しながら、『論語集注』に結実させていったのである。ただ朱熹は先人たちの語をかなり自由にアレンジして引用しているのであって、以下その実態を見ていきたい。

三、二程子の語の引用

『論語集注』の引用の柱は程顥と程頤の二程兄弟と張載であって、先にも言ったように「程子」、「張子」と敬称をもって記されている。ここで注目されるのは、本来は完全に思想的に同一とは言えない二程兄弟を区別せず一丸のものとして扱っていることである。朱熹は『論語集注』では特にこの姿勢を貫徹させているのである。なお『論語集注』では周敦頤の語の引用は無い。

ただこの「程子」の引用は、原文通りのものではなく、かなりのアレンジを加えている。例えば『論語集注』爲政第二・第一八章には次のように「程子」の引用がある。（なお以下の引用のうち文面の異同を問題にする箇所は、視覚的にそれがわかるようにあえて原文のみにとどめている）。

程子曰、脩天爵則人爵至。君子言行能謹、得禄之道也。子張学干禄、故告之以此、使定其心而不為利禄動。若顔閔則無此問矣。或疑、如此亦有不得禄者。孔子蓋曰、耕也餒在其中。惟理可為者為之而已矣。

ところがこの箇所に該当する『論語精義』一下では、次のようになっている。

伊川解曰、‥‥

又語録曰、‥‥修天爵則人爵至、禄在其中矣。子張学干禄、故告之以此、使定其心而不為利禄動。若顔淵則不然矣。‥‥

又曰、‥‥或疑、如此亦有不得禄者。孔子蓋曰、耕也餒在其中矣、唯理可為者為之而已矣。

要するに『論語集注』では一時の言葉のようになっている語が、いくつかの語をアレンジし合体させたものなのである。そして更に『論語精義』のもとになった二程子の原資料を見ると、実はこれらの語が一人のものではなく、程顥と程頤の語をつなげているのがわかるのである。まず「伊川解曰」とは程頤の『論語解』であるが、その後の「又語録曰」に該当するのは

修天爵則人爵至、禄在其中矣。子張学干禄、故告之以此、使定其心而不為利禄動。若顔閔則不然矣。（『程氏外書』六・第三一条）

という程頤の語であり、次の「又曰」に該当するのは

或疑、如此亦有不得禄者。孔子蓋曰、耕也餒在其中矣。唯理可為者為之而已矣。（『程氏遺書』一一・第七五条）

という程顥の語である。このように朱熹は、程頤と程顥の語をアレンジしながらつなげて一時に一人が語った語のようにして『論語集注』に引用しているのである。

また次の『論語集注』里仁第四・第八章の語を見てみよう。

程子曰、言人不可以不知道。苟得聞道、雖死可也。又曰、皆実理也。人知而信者為難。死生亦大矣。非誠有所得、豈以夕死為可乎。

「程子曰」、「又曰」と続くことからともに同一人物の語のように見えるが、これも実は前者が程頤、後者が程顥の語の引用なのである。いちおうもとの語をあげておこう。

人不可以不知道。苟得聞道、雖死可也。（程頤の語。『程氏経説』六『論語解』里仁）

皆実理也。人知而信者為難。‥‥死生亦大矣。非誠知道、則豈以夕死為可乎。（程顥の語。『程氏遺書』一一・第七三条）

以上のような例は枚挙に暇が無いが、更にいくつかの箇所の語をあたかも一時の語のようにつなげたうえに、出典未詳の語句も存在している例もある。例えば『論語集注』子罕第九・第二九章には、次のような「程子」の引用がある。

程子曰、漢儒以反経合道為権、故有権変権術之論皆非也。権只是経也。自漢以下無人識権字。

これに該当する『論語精義』五上の箇所は次の通りである。

伊川曰、‥‥

又曰、人多以反経合道為権、実未嘗反経。‥‥

又曰、古今多錯用権字。才説権、便是変詐或是権術。不知権只是経所不及者。権量軽重、使之合義。才合義、便是経也。‥‥

又曰、‥‥能用権乃知道、亦不可言権便是道也。自漢以下更無人識権字。

「伊川曰」として引用した後に「又曰」と続くのは、全て程頤の語ということを示している。そこでこれらの語をもとの二程子の原資料の中に探してみると以下のようになる。まず最初の「又曰」であるが、これは程頤の語録や文章には見つからない。ただこのフレーズは程頤の「権」説を代表する極めて重要なものである。次の「又曰」に該当するのは、

漢文帝殺薄昭。‥‥古今多錯用権字。纔説権、便是変詐或権術。不知権只是経所不及者。権量軽重、使之合義。纔合義、便是経也。‥‥（『程氏遺書』一八・第二一一条）

であり、その次の「又曰」に該当するのは

能用権乃知道、亦不可言権便是道也。自漢以下更無人識権字。（『程氏遺書』二二上・第八四条）

であり、ともに間違いなく程頤の語である。この「権」についての議論はかなり重要な箇所にもかかわらず、朱熹は出典不明の程頤の語を決め手として使用しているのである。

ところでかかる語録は弟子が記録した二程子の語がもとになっているが、二程子自身が書いた文章も「程子曰」として引用されている。例えば程顥の文章を引用しているのは『論語集注』子路第一三の第一一章と第一二章であって、ここでは「程子曰」として程顥の「南廟試策」第五道（『程氏文集』五）を引いている。しかし原文と対照させてみると相当に文章をアレンジしているのである。朱熹は弟子が記録した語録のみならず、当人自らが筆を取った文章までもかなり改変して引用しているのである。朱熹は原典通りに一字一句正確に引用することを期すよりも、自己が理解した内容をともかくも示そうとしているのである。

四、引用の混乱

『論語集注』には他者の語なのにそれを明示せず利用している箇所がある。それは『論語集注』里仁第四・第五章の

君子之審富貴而安貧賤也如此。

であって、これは張九成の語であった。そのことを朱熹は

熟知していたことは次の語からわかる。

張子韶（張九成）の「富貴に慎重に対処し貧賤に動揺しない」という言葉は非常によい。［張子韶説、審富貴而安貧賤，極好。］（『朱子語類』一二六・第二六条）

張子韶はこう言っている、「これは、君子は富貴に慎重に対処し貧賤に動揺しないことを言う」。［張子韶云、此言君子審富貴而安貧賤。］（「答程允夫」四、『朱子文集』四一）

なおこの箇所を『論語精義』二下には引用せず、王応麟は『困學紀聞』七で、

朱子は無垢（張九成）を雑学として批判した。『論語集註』では「富貴に慎重に対処し貧賤に動揺しない」の語のみを取っている。［朱子以無垢為雑学。論語集註独取審富貴安貧賤之語。］

と言う。この人物は道学では最も仏教に接近した人物であって、朱熹は「雑学弁」で厳しく批判を加えている。ただその存在感は大きなものがあり、無視できない人物であった。朱熹は否定の対象であるはずの張九成の語を、当人の語であることを知りながら、自分の語として記しているのである。

また尊崇の対象であった張載の語を張載のものと断らずに記しているケースもある。それは『論語集注』陽貨第一七・第九条の

人倫之道、詩無不備。二者挙重而言。

であって、この箇所の『論語精義』九上は、

横渠曰、‥‥。又曰‥‥。又曰、‥‥詩中君臣父子兄弟夫婦朋友莫不皆有。‥‥止言事父事君、最挙其重者言也。

と明確に張載の語であることを明記していて、おそらく張載『正蒙』楽器篇第一五がもとなのであろう。なお、張載の語を引きながら断っていないのは、『論語集注』第一九・第二五章もそうである。

その他、引用人名の食い違いがある。それは例えば『論語集注』里仁第四・第二三章の

尹氏曰、凡事約則鮮失。非止謂倹約也。

という語であって、ここでは尹焞の語として引用されているが、『論語精義』二下に

侯曰、約近於礼。故失之鮮。又曰、不必只倹約。凡事皆要約之以礼、然又要得中。

とあることからすると、侯仲良の語である。

これらは朱熹のミスなのか、それとも確信犯的に行ったのかははっきりしないのであるが、筆者は朱熹があまり拘

泥していなかったのではないかと思っている。朱熹が求めた厳密さは典拠の正確さではなく、内容がいかに彼自身の解釈に的確にかなっているかであった。

『論語集注』には引用の誤りもあり、『論語集注』憲問第一四・第四二章では、『詩経』邶風の詩を衛風として引く。また内容の不整合もあり、『論語集注』顔淵第一二・第一〇章ではその語の一部が季氏第一六・第一二章の冒頭にあるべきとする程頤の語をあげるが、季氏第一六・第一二章の方では程頤の語を取らず胡寅の説の方を支持している。

『論語集注』は

吳仁父にこのように告げられた、「私の『語孟集注』は、一字を添えることもできず、一字を減らすこともできない。貴君は子細に読まれよ」。また言われた、「一字も余計ではなく、一字も不足しない」。［語吳仁父曰、某語孟集注、添一字不得、減一字不得。公子細看。又曰、不多一箇字、不少一箇字。］（『朱子語類』一九・第五九条）

と言うように、一字も増減できないと朱熹が満腔の自負を表明した書物である。この語は甘節の記録であって、一一九三～四年（朱熹六十四～五歳）、一一九六年（朱熹六十七歳）の時期であるから、七十一歳で死んだ朱熹の晩年を迎えようという頃のものである。現行のテキストは意外なほど字句の異同が少ない。それは改訂途上のテキストがその都度世に出たのではなく、晩年頃の比較的安定したテキストの異本の範囲だからであろう。それなのに上記のような問題点があるということは、朱熹の力点が原典の正確な引用にはなく、あくまでも自己の注の内容が彼の考えに沿うことにあったからなのであろう。

五、朱熹の引用姿勢

朱熹は、先人の引用をする際、字面の正確さよりも内容の的確さと明晰さの方が重要だと思っていた。

先人の解釈はたぶん後学はわかりづらい。それ故『集注』ではその要点を取り、それを記した後で、更にそれに対する注釈を添えるというようにならないようにした。そこを熟読しさえすれば、自然にわかるのであって、無駄に心を煩わせてあっちこっち穿鑿しない方がよい。［前輩解説、恐後学難曉。故集注尽撮其要、已説尽了、不須更去注脚外又添一段説話。只把這箇熟看、自然曉得、莫枉費心去外面思量。］（『朱子語類』

一九・第六三条）

つまりそのためにはあえて原文の要旨のみを取り、引用したうえで更に解説を付す必要を無くしたというのである。朱熹が『論語集注』で先人の説を引く場合は原文を増減変改していることは弟子たちも認知していた。それをふまえたうえで下記のような質問と応答がなされている。

おたずねした。「集注では先人の説を引く際に、本文を増減変改しているのが、どういう意図からでしょうか」。先生は言われた、「その説に欠陥がある場合、更にその下に注脚を施すということをしたくないからね」。［問、集注引前輩之説、而増損改易本文、其意如何。曰、其説有病、不欲更就下面安注脚。］（『朱子語類』一九・第六四条）

朱熹は先人の説に問題がある場合、それに更に注をつけるような煩瑣なことをしないために手を入れたというのである。朱熹が引用する場合に原文を大幅に手に入れるのは自覚的になされているのである。

また二つの注を並べている場合は、両方とも成り立つケースだが大体において前に引くほうが優れているとも言う。

ある人がたずねた。「『集注』で二つの解釈を並べている場合、どちらが優れているのですか」。先生が言われた、「私が優れていると認識したのであれば、どうして劣っているものを残すかね。二説とも通ずるからこそともに残したのだ。必ずどちらかが聖人の本意にかなっているはずなのだが、ただわからないだけだ」。また言われた、「だいたいのところ両方の説がある場合は、前の説の方が優れている」。［或問、集注有両存者、何者為長。曰、使某見得長底時、豈復存其短底。只為是二説皆通、故并存之。然必有一説合得聖人之本意、但不可知爾。復曰、大率両説、前一説勝。］（『朱子語類』一九・第六六条）

更に『論語集注』に類似した説が並ぶ場合はたがいに補足しあう関係、全く異なる説が並ぶ場合は是非が未定の場合であると言う。

『集注』で類似して差が少ない両説は互いに補いあうようにということである。全く異なる両説は、どちらがよいか決定できなかったのである。［集注中有両説相似而少異者、亦要相資。有説全別者、是未定也。］（『朱子語類』一九・第六五条）

朱熹は『論語集注』で助字の類にまで神経を使った。それは

またおたずねした。「文義を解釈した箇所で、『者』の字を用いたり、『謂』の字を用いたり、『猶』の字を用いたり、そのまま解説したりしているのは、軽重の差はどのようなことなのですか」。言われた。「そのまま解説しているのは、そのままそう解釈しろということである。『猶』の場合は、『なおこのようだ』ということだ」。またおたずねした、「『者』はどうですか」。言われた、「このようにということだ」。［又問、解文義処、或用者字、或用謂字、或用猶字、或直言、其軽重之意如何。曰、直言、直訓如此。猶者、猶是如此。又問、者謂如何。曰、是恁地。］（『朱子語類』一九・第六四条）

と言うように、ある語を解説する際に、そのまま説明する、「猶」を使用する、「者」や「謂」を使用する、といったそれぞれの場合を区別したと言う。

その他、

『集注』の中で先人の説を原文の下に記しているのは、その箇所の文義を解釈しているのだ。先人の説を章末に置くのは、一章の大旨を説いたりその章から出てくる内容を反覆したりしているのである。［集注内載前輩之説於句下者、是解此句文義。載前輩之説於章後者、是説一章之大旨及反覆此章之余意。］（『朱子語類』四〇・第三一条）

と、先人の説を本文の下に付す場合はその原文の解釈であり、章の末に付す場合はその章の大旨や敷衍される内容の説明とする。また

章末に○印を記し、それから諸家の説を並べているのは、本文には直接書いていないがそこからわかる内容で見過ごすことができないものとか、一章の意を概括し、その内容を再確認し、わかっておくことが切に求められるものである。［章末用圈、而列諸家之説者、或文外之意、而正文有所発明、不容略去、或通論一章之意、反復其説、切要而不可不知也。］（趙順孫『論語纂疏』所収「読論孟集註綱領」に引く「朱在過庭所聞」）

と、章の末に○印がありその後で先人の説を引く場合は原文に無いが原文から敷衍できる内容、あるいは特に強調すべき章全体の意味であるとする。いわゆる「圈外の説」である。

以上のように、朱熹は引用の際に自覚的に思い切って原文をアレンジしたり、注の表記や配列、付す位置などに細心の注意を払っているのであって、ここに見られるのは彼の自己の思想的主張を貫こうとする強固な意志である。

六、『論語集注』の立場

朱熹は『論語集注』で正統的な道学の『論語』の解釈を示そうとした。その正統性とは朱熹にとっての正統性であって、これが果たして歴史的にみた道学の正統と言えるかどうかは別の問題である。ともかくも朱熹はそのためにも道学の資料を網羅し整理し、その中の矛盾を彼の思想を軸に調停し、そして道学の内外に示せる道学的『論語』注釈の決定版を完成させたのである。ここには儒教内部における道学の正統性と、道学内部における朱熹の正統性の二重の正統性の主張があるが、そのことについては既に論じたことがある。(8)

ところで『論語集注』における『論語』解釈の特質であるが、それは聖人（孔子など）、道の伝授に関われる特別な弟子（顔回、曾参など）、高弟（子路、子貢など）、常人（普通の弟子など）のそれぞれの境地の差を切り分けて説明していることにある。朱子学と言えば宇宙や心性の構造論ばかりに注目がいくが、本書ではそのような問題よりも、聖人の境地に焦点があたっている。そしてその聖人の境地は、常人の意識のあり方をふまえたうえで、渾然たる一理として呈示されている。それは次の諸例に現れている。

聖人の心は渾然一理であって、広くすみずみにまで対応し、しかも働きはそれぞれ異なる。［聖人之心、渾然一理、而泛応曲当、用各不同。］（里仁第四・第一五章）

聖人などは渾然としていて間断が無い。［若聖人、則渾然無間断矣。］（雍也第六・第五章）

聖人の心は渾然たる天理であって、極めて困難な状況でも常に楽しむ。［聖人之心、渾然天理、雖処困極、而楽亦無不在焉。］（述而第七・第一五章）

ただ聖人だけは本体全体が渾然としていて、陰陽は徳に合し、それ故中和の気がこのように容貌に現れているのである。［惟聖人全体渾然、陰陽合徳、故其中和之気見於容貌之間者如此。］（述而第七・第三七章）

このような聖人の境地の表現は、常人から目上げた聖人の姿である。個別的な理の実現を図ることが求められる常人の遙か先には個別的な理が収束する一理の世界がある。そしてそこに行き着くためには着実な日常の学問や実践が必須なのである。

朱熹は日常での礼や徳行、着実な学問を重視して、ともすれば道学が高遠に馳せる傾向を持つのを警戒した。『論語』子張第一九・第一二章で、孔子の弟子の子游が同じく弟子の子夏に対して、子夏の弟子たちは「洒掃応対」に関

しては問題無いが根本が欠けていると評したところ、子夏が君子の道には順序があると反論している。この章について朱熹は、孔子の語ではなく弟子の問答なのに長大な注釈をつけているが、そこには二程子の語が五条も列挙されている。

程子が言われた。「君子が人を教える場合には順序がある。先ず小さいことや身近なことを伝え、その後で大きなことや高遠なことを教えるのである。先ず身近で小さいことは教えるがその後で高遠で大きなことを教えない、というのではない」。また言われた。「掃除や応接の礼儀作法は、実は形而上である。これは理に大小の差が無いからである。それ故君子が留意するのは、自分のみが知りうる内面を慎むことである」。また言われた。「聖人の道は、精と粗の区別は無い。掃除応接の礼儀作法から、道義に精通して霊妙な域にまで至ることは、ただ一理で貫通している。掃除応接の礼儀作法であっても、その根拠がいかなるものかを見ていくのである」。また言われた。「万物には本と末の区別がある。本と末を分けて二つの段階とすべきではない。掃除応接の礼儀作法もそうであって、必ずそうである根拠がある」。また言われた。「掃除応接の礼儀作法から、聖人の段階にまで到達すべきなのである」。私が思うに、程子の上記のうちの第一条は、本文の文意を最も詳しく説き尽くしている。その後の四条は全て、精と粗、本と末はそれぞれ独自の持ち前があるが、それらの理は一であって、学ぶ者は順序に従って徐々に前進していき、末を面倒がって本を性急に求めるべきではないことを明らかにしている。［程子曰、君子教人有序。先伝以小者近者、而後教以大者遠者。非先伝以近小、而後不教以遠大也。又曰、洒掃応対、便是形而上者。理無大小故也。故君子只在慎独。又曰、聖人之道、更無精粗。従洒掃応対、与精義入神、貫通只一理。雖洒掃応対、只看所以然如何。又曰、凡物有本末、不可分本末為両段事。洒掃応対是其然、必有所以然。又曰、自洒掃応対上、便可到聖人事。愚按、程子第一條、説此章文意、最為詳尽。其後四條、皆以明精粗本末。其分雖殊、而理則一。学者当循序而漸進、不可厭末而求本。］（『論語集注』子張第一九・第一二章）

これは順次、『程氏遺書』八・第二〇条（程顥か程頤の語）、『程氏遺書』一三・第九条（程顥の語）、『程氏遺書』一五・第七五条（程頤の語）、『程氏遺書』一五・第四一条（程頤の語）、『程氏遺書』五・第三一条（程顥か程頤の語）である。

ここには、二程子の語を借りて、掃除応接の礼儀作法のような形而下的な努力と高遠な道理の認識の両方の必要性が説かれているが、眼目は掃除応接といった礼儀作法の段階をまず踏むことが必須であることにある。道学の祖の二程子がかかる日常の地道な営為を重んじていたことを朱熹は証明するために、孔子の弟子の語にもかかわらず五条も二程子の語を引用したのであって、ここには当時の道学の高遠志向への朱熹の批判が潜んでいる。

○　おわりに

『論語』は四書の中に位置づけられている書物である。そしてその四書の読書の階梯は次のように示されている。

私はまず人に『大学』を読ませ、それで学問の範囲を定めさせる。次に『論語』を読み、それで根本を確立させる。次に『孟子』を読み、それで感発するところを見させる。次に『中庸』を読み、それで古人の微妙な問題を求めさせる。『大学』には踏み行うべき段階の順序があり、それが一箇所にまとめられているのでわかりやすいから、まず読むべきである。『論語』はむしろ具体的であるが、ただ言葉があれこれ散在しているので、いきなり読むのは難しい。『孟子』は人心を感発する点がある。『中庸』もまた読むのが難しく、三書を読んだ後で、初めて読むべきである。［某要人先読大学、以定其規模。次読論語、以立其根本。次読孟子、以観其発越。次読中庸、以求古人之微妙処。大学一篇有等級次第、総作一処、易曉、宜先看。論語却実、但言語散見、初看亦難。孟子有感激興発人心処。中庸亦難読、看三書後、方宜読之。］（『朱子語類』一四・第三条）

『論語』とは、聖人に至る学のプログラムを『大学』で知った後で「根本を確立する」ものである。ただ『論語』は「言葉があれこれ散在している」ので、『大学』を通して理解したプログラムの中にそれぞれの語を位置づけながら自分がどのような段階にあり、何を目指すのかを自覚しながら読むことが必要となる。一例をあげると、里仁第四・第一五章は、次のような有名な孔子、曾子（曾参）、門人の対話である。

先生が言われた、「参（曾子）よ、私の道は一ということで貫いているのだよ」。曾子が言われた、「はい」。孔子が退出された。そこで門人が曾子に問うて言った、「どういう意味だったのですか」。曾子が言われた、「先

生（孔子）の道は、忠恕ということなのだ」。［子曰、参乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。］

単純に考えると、曾子は、孔子の「道」を「忠恕」と解釈したということになるが、そうなると重要ではあるものの道徳の代表とは言えない「忠恕」が道全体の代名詞のようになってしまう。そこで朱熹は『論語集注』で、まず孔子の「一以て之を貫く」境地を

聖人の心は、渾然たる一理であって、あまねく万事に応じて隅々まで適切に応対し、その働きは融通無碍である。［聖人之心、渾然一理、而泛応曲当、用各不同。］

と説明する。そのうえで曾子は心の本体が一であることを悟れる可能性を持っていたがまだそこまでいっていなかったので、曾子にこのように告げたところ、曾子は言外に悟ったのだと説明する。つまり聖人である孔子と賢人である曾子の境地の差を分けたうえで前段を解釈しているのである。そして次に曾子が門人に対して孔子の「道」を「忠恕」としたのは、曾子はこの境地を言葉で説明するのが難しいためであるとする。

そこで、自己の心を尽くし、自分の心を推し広げていくという学ぶ者がなすべき具体的項目を借りて、このことを明らかにした。［故借学者尽己推己之目、以著明之。欲人之易暁也。］

今度は賢人である曾子と常人である門人の境地の差を言うことで、常人は日常の中で「忠恕」のような具体的道徳にまず努め、その先にあらゆる事態に適切に対応しながら意識は一貫して自然であるという境地が求められるということが示されるのである。このように常人、賢人、聖人の段階の差を認識して『論語』を読むことで、聖人に到達するための学の中でそれぞれの言葉の位置づけができると朱熹は考えていた。自己が各段階のどこに位置しているかを見定めることによって、『論語』の言葉が今実践すべきことであったり、見上げるべき目標となったりするわけである。『論語』はかくて学問修養する人にとって切実な書物となるのである。

まことに『論語集注』は、聖人を目指す人々のための手引きなのである。

注

（1）道学の祖を周敦頤とするのは朱熹がそれを強調したからであって、それまでは道学とは二程学派であった（土田健次郎『道学の形成』、創文社、二〇〇二）。

（2）清・王懋竑『朱子年譜』、『朱子年譜考異』、山根三芳「朱子著作年代考」一～三（『漢文教室』八四～八六、一九六八）、束景南『朱熹年譜長編』（華東師範大学出版社、二〇〇一）など。

（3）この書簡の時期については、陳来『朱子書信編年考証』（上海人民出版社、一九八九）。以下書簡の年代はこれに拠る。

（4）注（2）所引の『朱子年譜』、『朱子年譜考異』。

（5）ここの記録の年代は、田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』三、汲古書院、二〇〇一）。以下、朱熹の記録の年代についてはこの論文に拠る。

（6）「劉聘君」（劉勉之）、「師」（李侗）、「張敬夫」（張栻）、「劉侍読」（劉敞）といった表記も見える。

（7）ただ『論語解』は未完だったようであり、また『論語説』という書名表記のテキストもある（朱熹著・土田健次郎訳注『論語集注』四の「訳注者あとがき」、平凡社、二〇一五）。

（8）注（1）所引の前掲書の終章。

（本稿は、二〇一五年六月二〇日に國學院大學中國學会第五十八回大会で行った講演「『論語集注』はどのような書物か」の内容をもとにしている。）

〔キーワード〕朱熹、朱子学、論語集注、四書集注、論語